

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 11 日現在

機関番号：12603

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2016

課題番号：25770166

研究課題名(和文)韓国語諸方言におけるN型アクセントの実態調査研究

研究課題名(英文)Study of N-pattern accent system of Korean Dialect

研究代表者

姜 英淑(kang, youngsuk)

東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・研究フェロー

研究者番号：80610162

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、韓国語のN型アクセント体系(語声調)と分類されてきた方言のアクセントの実態を明らかにしつつ、アクセント核と語声調が一つの体系内に共に存在するという理論の一般化を図るための記述研究であった。西部慶尚道は、河東方言を実地調査した。江原道方言は、寧越(徳邱里、九来里)・旌善・三陟方言(遠徳邑)を対象に、アクセント性質を明らかにした。全羅南道は光陽市方言を中心に実地調査を行い、その他に求禮方言及び順天方言のアクセントを実地調査をし、そのアクセント体系を解明した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I would like to clarify the N-pattern accent systems of the Western Gyeongsang dialects, Jeollanam-do dialects and Gangwon-do dialects. It aims to be the generalization of the theory that accent-kernel and the word-tone can coexist within the accent system of the noun.

I analyzed the Hadong dialect of Western Gyeongsang as a four-pattern accent system, in which one accent-kernel and three word-tone is distinguished. I have also pointed out the prosodic properties of accent kernel and word-tone of Yeongwol-gun, Jeongseon-gun, Samcheok-si in Gangwon-do dialects. And the last one, I clarified the accent system of the Gwangyang dialect, the Gure dialect and the Suncheon dialect.

研究分野：人文学

キーワード：韓国語諸方言 N型アクセント アクセント核 語声調 慶尚道諸方言 全羅南道諸方言 江原道諸方言

1. 研究開始当初の背景

韓国語の諸方言は、日本語のような高さアクセントであり、アクセント(核)若しくは語声調が有意味であると解釈され、「多型アクセント体系(アクセント言語)」と「N型アクセント体系(語声調方言)」に大きく分類されてきた。しかし、姜英淑(2008)は、韓国慶尚南道(きょんさんなむど)の11の方言を実地調査し、すべての方言が1つの体系の中にアクセント核と語声調(狭義のアクセントと声調)を兼ね備えていることを新たに主張した。これは慶尚南道諸方言のみならず、韓国語諸方言においても言えることと考えられる。これを論証するため、従来N型アクセント(語声調)と分類されてきた諸方言アクセント体系の中にも一つのアクセント概念では説明できない特徴があり、それは性質の異なるアクセントによるものであることを明らかにしなければいけない。そのため、従来N型アクセント(語声調方言)と分類されてきた諸方言を実地調査し、その体系の解明が必要になったことが本件研究の背景にある。

2. 研究の目的

本研究は、韓国語諸方言の内、N型アクセント体系(語声調)と分類されている方言のアクセント実態を明らかにしつつ、「アクセント核と語声調が1つの体系内に共に存在する」という理論の一般化を図るための記述研究である。従来N型アクセント(語声調)と分類されてきた西部慶尚道の一部の方言及び江原道諸方言、全羅南道諸方言を実地調査し、そのアクセント実態を報告することと共に、今後のアクセントや声調に関する一般理論に寄与することを目的とする。

3. 研究の方法

本研究は、数回に渡るフィールドワークを行い、インタビュー調査で得られた資料に基づく記述により達成できる。なるべく高齢層(60代以上)のインフォーマントをさがし、基本的には1対1の調査を行うが、本研究で計画している調査地域は、西部慶尚南道方言以外は、個人差がある可能性が高く、複数の話者を対象にした調査が必要である。語彙全般に渡る調査のため、数日程度の滞在が必要である。調査資料は調査地に行く前に準備するが、方言形などは現地で追加することもある。具体的には、名詞項目・複合名詞項目・用言などの語彙リストを作成する。そのリストに基づき単独の形・助詞付きの形・短文を2回ずつ発音する読み上げ式で、録音を行う。その録音資料を聞き直し、アクセントの特徴や体系の解明を行う。

4. 研究成果

本研究は主に、西部慶尚南道地域、江原道地域および全羅南道地域の方言が対象であり、そのアクセント記述及び体系の解明を中

心とした。

(1) 河東方言のアクセント

付属語付きの音調特徴から河東(Hadong)方言の4音節までのアクセント体系は表1のようにまとめることができる。便宜上、語声調における下降はアクセント核と区別をするため「J」で表記する。

<表1> 河東方言のアクセント体系

	1音節	2音節	3音節	4音節
①	○]	○]○	○]○○	○]○○○
≡	[○]	[○○]	[○○]○	[○○]○○
∧	[[○]	○[○]	○[○]○	○[○]○○
-㉔		○[○]	○[○]○	○[○○]○

①は、第1音節に核があるアクセント型であり、その位置が弁別的である。この方言には有核型が1つしか存在しないことになる。語末核型の1音節語は慶尚道諸方言で広くみられる「語末核型規則」を受けるが、その現れ方は、文節全体で-㉔になる。

≡~-㉔は、文節全体の形により弁別される語声調である。≡と∧は、下降の位置(第2音節の後)が同じであり、形のみによって弁別される。これに対して、-㉔は、≡と∧とは下降の位置によって弁別される。この点、語声調相互の弁別には形のみではなく下降(J)の位置も有効である。

以上、河東方言はアクセント核と語声調が共に存在するアクセント体系であると解釈する。

(2) 寧越方言のアクセント

江原道(Kangwon-do)の寧越郡(Yeongwol-gun)は、寧越邑(Yeongwol-eup)と上東邑(Sangdong-eup)の2つの邑(町)と7つの面(村)があり、本研究は上東邑の徳邱里(Deokgu-ri)と九来里(Kure-ri)2か所のアクセント体系を対象としている。

<表1> 徳邱里方言のアクセント体系

	1音節	2音節	3音節	4音節
①	○]	○]○	○]○○	○]○○○
②		○○]	○○]○	○○]○○
③			○○○]	○○○]○
④				○○○○]
⑤				
≡	[○]	[○○]	[○○]○	[○○]○○

①型~⑤型は、核の位置による対立するものであり、これに対しては、≡文節全体に「[○○]○…」の声調(形)が被さった語声調である。語声調においては、第2音節で必

ず下降が現れるため、‘どこで’ と言う位置は有意味である。

以上、徳邱里方言は、n 個のアクセント核と一つの語声調を併せ持っている体系である。

<表 3> 九来里方言のアクセント体系

	1 音節	2 音節	3 音節	4 音節
①	○]	○]○	○]○○	○]○○○
②	[○]	[○○]	[○○]○	[○○]○○
-②		○[○]	○[○]○	○○[○]○

①型は、第 1 音節に核があるもので、語末核型の 1 音節語は「語末核型規則」の特徴が現れる。

②は、文節を単位に‘HHL…’の音調パターンが被さっている語声調である。

-②は、文節を単位に‘LLH…L’の音調パターンが被さっている語声調であり、②とは下降の位置で弁別されている。

以上、九来里方言は、一つのアクセント核と二つの語声調を併せ持っている体系である。

(3) 三陟方言のアクセント

江原道の三陟市 (Samcheok-si) は、二つの邑 (町) と 6 つの面 (村) があり、本研究では遠徳邑 (Wondeok-eup) の魯谷里 (nokok-ri) と理川里 (Icheon-ri) のアクセントを実地調査した。

<表 4> 魯谷里方言のアクセント体系

	1 音節	2 音節	3 音節	4 音節
①	○]	○]○	○]○○	○]○○○
②		○○]	○○]○	○○]○○
③			○○○]	○○○]○
④				○○○○]
≡	[○]	[○○]	[○○]○	[○○]○○

①~③は核の位置により対立するものであり、これに対しては、≡文節全体に‘[○○]○…’の形が被さった語声調である。4 音節語においては語例が少なく、「3 音節語+付属語」の音調型で多く現れる。また、文中では語頭の高い音調が低く発音され、○[○]…で現れることが多い。②型への合流による現象と捉えられる。

以上、魯谷里方言は、n 個のアクセント核と一つの語声調を併せ持っている体系であると結論付ける。

<表 5> 理川里方言のアクセント体系

	1 音節	2 音節	3 音節	4 音節
①	○]	○]○	○]○○	○]○○○
②		○○]	○○]○	○○]○○
③			○○○]	○○○]○
④				○○○○]
∧	[○]	○[○]	○[○]○	○[○]○○

理川里方言のアクセント体系は、表 4 の魯谷里方言とほぼ同じであるが、語声調の形が異なる。文節を単位に、○[○]○…の形が被さっているが、語例は魯谷里方言の≡とほぼ同じである。これは魯谷里方言の語声調≡の第 1 音節が低くなったことによるものと捉えられる。ただし、3 音節語以上では②型と単独でも助詞付きでも音調の上では区別されない。しかし、2 音節語においては特殊付属語が付くと②型には語末核型規則により○○○]○で現れることに対して、語声調の 2 音節語は文節が長くなっても常に○[○]○であられることにより弁別を保っている。よって、3 音節語、4 音節語は表層では区別されないが、基底では弁別を保っていると解釈する。

この解釈により、理川方言は、n 個のアクセント核と一つの語声調を併せ持っている体系であると結論付ける。

(4) 旌善方言のアクセント

江原道の旌善郡 (Jeongseon-gun) は、4 つの邑と 5 つの面があり、本研究では餘糧面 (Yeoryang-myeo) のアクセントを実地調査した。

<表 6> 餘糧面方言のアクセント体系

	1 音節	2 音節	3 音節	4 音節
≡	[○]	[○]○	[○○]○	[○○]○○
∧	[○]	○[○]	○[○]○	○[○]○○
-②		○[○]	○[○]○	○[○○]○

3 つの語声調が対立を成す方言である。語声調‘≡’の 1 音節語には特殊助詞が付くと○[○]○のように発音され、語末核型規則による現象が現れる。これは、本来アクセント核型の①型が下降の遅れにより[○○]○…に合流したものと捉えられ、語末核型の 1 音節語は本来の特徴を保っているものと解釈する。

(5) 光陽地域方言のアクセント

全羅南道 (Jeollanam-do) 光陽市 (Gwangyang-si) は、1 つの邑と 6 つの面があり、本研究では多鴨面 (Daap-myeon)、金湖島 (洞) (Geumho-do)、光陽邑 (Gyangyang-eup) 方言のアクセントを実地調査した。

査した。

<表7>多鴨面方言のアクセント

	1音節	2音節	3音節	4音節
①	○]	○]○	○]○○	○]○○○
≡	[○]	[○○]	[○○]○	[○○]○○
-㉔		○[○]	○[○]○	○[○○]○

①型は、第1音節に核があるもので、語末核型の1音節語は「語末核型規則」の特徴が現れる。≡と-㉔は、文節全体に形が被さっている語声調であり、語声調相互は下降の位置によって弁別される。

よって、この方言は、1つのアクセント核型と2つの語声調を合わせ持っている体系である。

<表8>金湖島方言のアクセント

	1音節	2音節	3音節	4音節
①	○]	○]○	○]○○	○]○○○
≡	[○]	[○○]	[○○]○	[○○]○○
-㉔		○[○]	○[○]○	○○[○]○

多鴨面方言と体系の上では同じであるが、語声調の-㉔の具体音調が1音節卓立型であることが異なる。

<表9>光陽邑方言のアクセント

	1音節	2音節	3音節	4音節
≡	[○]	[○○]	[○○]○	[○○]○○
-㉔		○[○]	○[○]○	○○[○]○

光陽邑方言のアクセントは、調査資料が十分ではないが、2つの語声調が対立を成していると解釈した。上記の2方言の①型が対立を失っており、2つの語声調だけが現れる。この2つの語声調も、4音節語以上ではほぼ弁別性を失っており、2音節語の助詞付きにおいて辛うじてその弁別性が保っている。また、文の中では音調型に関係なく、すべて‘○ ○…[○]’のように現れる特徴があり、これを仮に句のアクセントと呼ぶ。

(6) 求禮郡方言のアクセント

本来の研究計画で調査地点とはしていなかったが、光陽地域のアクセント体系が地域によって多様に現れることから、アクセントの変化の立場から、隣接地域のアクセント体系との対応を解明する必要があり、求禮方言や順天方言のアクセントを追加して実地調査を行った。

<表10>土旨面方言のアクセント体系

	1音節	2音節	3音節	4音節
①	[○]	[○]○	[○]○○	[○]○○○
②	[○]	○[○]	○[○]○	○[○]○○

調査資料としては十分ではないが、2つの語声調が弁別される体系である。付属語が付いても常にこの2つの音調型で現れる。㉔は文の中で言い続ける時は下降の遅れが生じ、[○○]○、[○○○]○のように現れ、㉔も、文の中で言い続ける時は下降の遅れにより○[○○]○、○[○○○]○のように現れることが多い。

(7) 順天方言のアクセント

順天方言は、音調型による対立はなく、○[○ ○…のみが現れる。[○○]○…も現れるが、分節音によって決まって現れるためアクセントによる対立ではない。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 6 件)

- ① 姜英淑 「韓国全羅南道麗水方言における2型アクセント」『言語文化研究』査読無、第33巻1号:117-139, 2013
- ② 姜英淑 「韓国語の麗水突山方言の用言のアクセント資料」『言語文化研究』査読無、第33巻1号:209-231, 2013
- ③ 姜英淑 「訓蒙字会における固有語の傍点I—叡山文庫蔵本を中心に—」『言語文化研究』査読無、第35巻1号:203-315, 2015
- ④ 姜英淑 「訓蒙字会諸異本における固有語の傍点(II)」『言語文化研究』査読無、第35巻2号:217-306, 2016
- ⑤ 姜英淑 「韓国語の寧越方言におけるアクセント性質—上東邑方言を中心に—」『言語文化研究』査読無、第36巻1号, 2016
- ⑥ 姜英淑 「韓国語の寧越郡上東邑方言のアクセント資料」『言語文化研究』査読無、第36巻1号, 165-197, 2016

[学会発表] (計 7 件)

- ① 姜英淑 「韓国麗水市突山方言の用言アクセント」日本言語学会第146回大会、東京外国語大学, 2013.6
- ② 姜英淑 「韓国麗水市蓋島方言のアクセント」国立国語研究所共同プロジェクト「日本語音韻特性」第2回研究会 金沢大学, 2013.9
- ③ 姜英淑 「釜山方言における語形成とアクセント」アジア・アフリカ言語文化研究プロジェクト 第3回研究発表会, 2015.3
- ④ 姜英淑 「韓国語釜山方言の混成語形成におけるアクセント」日本言語学会第151回全国大会, 2015.11
- ⑤ 姜英淑 「韓国光陽地域方言におけるアクセント」

セントの多様性」アジア・アフリカ言語文化研究プロジェクト 2015 年度 第 2 回研究発表会, 2016.3

⑥ 姜英淑 「韓国語釜山方言における接尾辞による派生語形成とアクセント」日本語学会第 152 回全国大会, 2016.6

⑦ 姜英淑 「韓国語釜山方言における複合動詞のアクセント」Japanese and Korean accent: diachrony, reconstruction, and typology 日本語・韓国語アクセントに関する国際シンポジウム アジア・アフリカ言語文化研究プロジェクト, 2016.7

〔図書〕 (計 1 件)

① 姜英淑 『韓国語慶尚道諸方言のアクセント研究』勉誠出版, 258pp, 2017.2

〔その他〕

① 姜英淑 「韓国語諸方言のフィールドワーク」フィールドプラス 17 号, 2017.2

6. 研究組織

(1) 研究代表者

姜英淑 (KANG YOUNGSUK)

アジア・アフリカ言語文化研究所・研究員

研究者番号: 80610162